

にいかにするにかと見居たれば、今までいひあらかひし老人が、あと一聲はなちて泣ふしぬ、ありあふものども、かれは心やたがひぬらんと見るほどに、たびくゝ涙をのごひて、

いふもうしいはぬもつらしむさしあぶみかゝるおりとこそ思ひまりてさふらへば、あはれ今日のことは、のどめ給はれかしと云出たり、さらばとて、いふがまゝに、けふはかへしてけり、又の日のもの、申やう、こたびのことは、共に中和らぎて、かれがすむべき家門づくり、又世わたるたづきともなれかしとて、二も、ひらをなん得させ侍らめ、と申せしかば、奉行をはじめ、下司も、それこそいとあらまほしき事なりけれとて、こと平らぎぬ、

雑載

〔奥儀抄 下ノ中〕さきだ、ぬくるのやちたびかなしきはながるゝ水のかへりこぬなり

是はむかしあひしれる人に、をくれたる男にやれる歌也、逝水不返、後悔不立前といふ事のある也、うせにし人にさきた、ぬを、後悔さきにたゝぬによせてくゐたる也、行水のかへらぬやうに、又くべきならねば、やちたびわぶるとも、かひやなかるらんとよめる也、